書　　評

ガイ・ハンター著『近代化する農民社会——アジア・アフリカの比較研究』

Guy Hunter, *Modernizing Peasant Societies: A Comparative Study in Asia and Africa,* Oxford University Press, London, 1969, xii + 324 pp.

本書はイギリスの Institute of Race Relations の刊行物であって，この研究所は発展途上諸国の開発についての研究をおこなっている．著者ハンターは主としてこの研究所によってアフリカやアジアについての研究活動を続けており，最近作には *The Best of Both Worlds?* 1967 がある．

本書は4部から構成されている．第Ⅰ部は出発点と題され，第1章：問題の性質，第2章：伝統的経済の背景と変化，第3章：村落における地位・権力・政治の3章がある．第Ⅱ部は農業開発と題され，第4章：一般的戦略，第5章：技術的要因，第6章：構造・土地保有・制度，第7章：農民との接触の4章からなる．第Ⅲ部は成長する社会と題され，第8章：行政，第9章：政治，第10章：教育，第11章：経済の4章からなる．第Ⅳ部は結論であり，第12章：新しい道がある．

以下本書の特徴的な論点を概観していく．まず開発にたいして農業が果す役割はきわめて重要であることが理解されねばならない．年増加率2～3％にたっする人口爆発は労働力過剰と失業の危機をうみだしている．農業は，他産業が発達しこの過剰労働力を吸収できるようになるまで，増加する人口の生活水準を維持していかなければならない．さらに農業開発は経済開発と直接に結びついているのであって，農業生産性が高まれば他産業の活動のための消費市場が用意されることになり，また農業での貯蓄が他産業への投資を可能にするのである．

ところで生産性を高めるための改革の導入はきわめて困難である．というのは，この地域の農民は，つねに生存限界ぎりぎりの生活をしており新機軸の失敗はただちに餓死を意味するから，保守的にならざるをえないのである．

著者はこのような発想にもとづいて，発展途上地域では大規模な機械化された労働節約的な農場よりも多数の小規模な農場のほうがはるかに高い生産性をもつことを具体的に示す．さらにこれと関連して地主制度の廃棄あるいは改革にも慎重でなければならない．すなわち地主制度は社会保障的な意義をもっており，また形式的でない農業金融源，生産物販売機構などとして，確立された社会関係の中心だからである．それとともに，農民に非農業雇用を与えるために農村地域に位置する小規模産業の育成をはかることは，戦略的にきわめて有利である．

さて同じ農民社会ではあるが，アジアとアフリカのあいだには大きな相違がある．アジアでは文化的に広い範囲の共通性があり，政治的には帝国・王国レベルまでの統合がなされていたのであるが，アフリカでは文化的にも政治的にも部族をこえる紐帯は形成されなかったからである．そのため伝統による拘束の弱いアフリカのほうがアジアよりも急速に変化する可能性がある．例を政治的動員にとると，アジアではたとえばインドの村落パンチャヤット (Panchayat) の形式的民主主義は伝統的カースト制度と抵触するため十分機能しているとはいえないのにたいし，アフリカの一党制度は村落レベルできわめて成功している．

以上みてきたように，本書の筆致は地味であり，また極端な改革を避ける漸進的なプログラムを提唱している．ただ経験的な事実に体系的に立脚しているとはいいがたく，それが本書の印象を散漫にしていることはいなめない．

（駒井　　洋）